

「子どもに本を手渡すということ」

橿原市図書館ボランティアの会

代表 西村 洋子

「子どもは、本が好きです。」と断言すると、「いやいや、うちの子は本が嫌いです。」「うちの子、本はまったく読みません。」という声が少なからず聞こえてきます。

近年では、子どもの読書量は増えているという調査結果が出ていますが、長年、図書館や小学校などで図書ボランティアに携わっている方々は、あまり実感していない、また、読書量は増えているとしても、“読書の質”は上がっていないのではないかという意見が多いです。

本屋さんでよく見かけるのが、子どもの本を悩みながら選んでいる保護者の姿です。お子さんに「どれにする?」「これ面白そうやで」を何度もくり返し、案の定、子どもは飽きてしまって、幼い子は泣きだす始末……。それで心配になるのが、「あの子、本を嫌いにならなければいいのだけど」……。 “本は楽しい” 何より私たちが伝えたいことです。大人が本を教育のために与えたいというのは当然ですが、それが子どもを本嫌いにさせる大きな原因となっていることに多くの人が気づいていません。もちろん読書が学力向上に役立つのは言うまでもないことですが、それには子どもが自ら本を手取るようになってくれないと意味がないのです。いやいや読むことは益々本嫌いを招くだけです。

それではどうすればいいのか、図書館や学校の図書室を充実させることが何よりだと思います。充実させるには、“子どもに本を手渡す人”が必要です。最近、子どもの読書推進のテレビコマーシャルが流れるなど、文部科学省は力を入れています。最近、子どもの読書推進のテレビコマーシャルが流れるなど、文部科学省は力を入れています。最近、子どもの読書推進のテレビコマーシャルが流れるなど、文部科学省は力を入れています。大抵の地方自治体は財政状況が悪いので、教育費は削減され、図書に係る人も経費も緊縮される一方です。わが橿原市もまさにそうです。残念ながら橿原市立図書館の児童書コーナーでも前述の本屋さんと同じような光景が見受けられるし、市内の小中学校には学校図書館司書は配置されていません。どんなに立派な図書館でも、学校の図書室にどんな良い本が揃っていても、そこに子どもに本を手渡す人がいなければ、はっきり言って意味がありません。児童書について知識と経験を持つ人がいて、子どもの年齢や発達段階をみて、様々なジャンルから本を選び、子どもに読書案内ができる人がいれば、子どもたちは本を手にとってくれます。

ある中学校でのブックトーク、本に興味をなさそうに見えた子が、ぱっと顔を上げて話を聞きだしたことがありました。何か感じるものがあつたのでしょうか。

子どもは本が好きです。でも、子どもに本を手渡す人がいない、これが現状です。

子どもは、未来そのものです。この未来を守るのは大人の仕事だと思うのですが。



ブックスタートでの読書案内

橿原市の機構改編に伴い、図書館は、橿原市魅力創造部文化振興課の管轄になりました。

そこで、4月21日に、橿原市図書館ボランティアの会、橿原文庫連絡会、橿原おはなしの会、橿原市学校図書館ボランティア連絡会の4団体に向けて、この機構改編についての説明会及び子どもの読書活動についての意見交換会が開かれました。

市としては、「市長の直轄の部署で、橿原市の文化振興を盛り上げ、新たな魅力を創造していく中で、万葉ホールを文化施設の拠点として有効に活用していくための機構改編です。」という説明をいただき、そのうえで今後、橿原市の子ども読書活動の現状と今後取り組むべき課題について、活発な意見交換をさせていただきました。私たちは、やはり、子どもの読書活動推進は図書館を中心に推し進めるべきで、ボランティアは本と子どもを“つなぐ”補助的役割を務めていきたいと申し入れをしました。

そこで、この意見交換会を受けて、今回のボランティアだよりも、それぞれの団体さんから「橿原市の子ども読書活動の現状と課題について」寄稿をお願いしました。

「子ども達が身近な場所で本に触れる機会づくりを」

橿原文庫連絡会 川西香子

現在、橿原市内では11か所で文庫が活動しています。各文庫は、地域の子どものたちへの絵本の読み聞かせや絵本や児童書の貸し出し等の活動を通して、子ども達に読書の楽しみを伝えています。地域の幼稚園や小学校と連携して、絵本の貸し出しや読み聞かせをしている文庫もあります。各文庫の世話人が集まって運営する橿原文庫連絡会は、橿原市内全域で図書に関するイベントをおこなったり、子育て支援として、絵本やわらべうたが子どもの心を育てることを伝える講座を実施しています。橿原文庫連絡会および各文庫は、こうした活動を通して、子ども達が身近な場所で図書に出会う機会を提供してきました。

昨今の子ども達を取り巻く環境の変化から、読書の楽しみを知らないままに成長している子ども達が増えていることは、とても残念なことだと思います。幼いころからたくさんの物語に出会い、本からたくさんの生き抜く力を得ることができた子どもは、学校という社会に出ても、自分で考え、自分で選び、困難を乗り越えていくことができると思います。文庫は地

域の中で、子ども達と近い距離にあります。市立図書館は市内に一か所しかないので、安全面を考えると図書館から遠い地域の子どものはなかなか通えません。地区公民館図書室が市立図書館の分館として機能していない現状では、今後も文庫が児童サービスの分館的役割としてお役に立てるのではないかと思います。図書館と文庫の連携を密にし、図書館の専門的知識を生かして、子ども達のために図書館と文庫とが協働してできることを模索していけたらと思います。また、人員配置は厳しいとは思いますが、司書資格をもった職員さんを多く配属していただき、私たちにも児童サービスや近年の傾向などについての研修もしていただけたらありがたいです。

「橿原市子ども読書活動推進計画報告書5か年のまとめ」には、現状と課題がしっかりと書かれています。橿原市の子ども達の読書活動の充実のために、図書館には課題解決にむけた取り組みをお願いするとともに、私たち橿原文庫連絡会もお役に立てることを探していきたいと思います。

「子どもたちに“おはなしと本の楽しい時間”を届けたい」

榎原おはなしの会

代表 堀川恵子

私たち「榎原おはなしの会」は、榎原市立図書館のストーリーテラー養成講座の修了生が、おはなしや本の楽しさを子どもたちに届けたいと、立ち上げたグループです。

活動は、毎月第2・4土曜日の図書館での「おはなし会」と、依頼を受けての市内幼稚園や小学校への「おはなし配達」です。

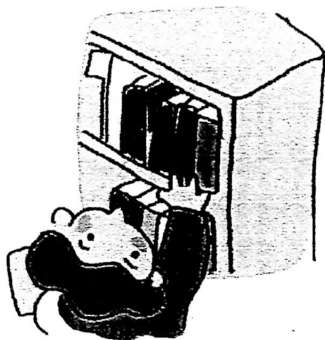
ストーリーテリングとは、語り手が物語を覚えて語ることを言います。語り手は、おはなしを自分のものとし、聞き手（子どもたち）と向き合って語ります。そこには、語り手が聞き手とお話の世界を共有し、深め合いたいという願いがこもっています。

子どもたちは、良い力のある本とうまく出会いさえすれば、本を楽しみ、本を読むことに喜びを見出すことができると思います。その体験が生きる力となるのではと思うのです。

図書館や学校の図書室は宝の山です。子どもたちが「おはなし会」や「おはなし配達」をきっかけに、図書館や学校の図書室で、そして家庭で本を楽しんでくれればと願います。

昨年度は、13園、12校、述べ8010人の子どもたちにおはなしを配達することができました。

これからも図書館や他団体と共に協力をし合って、子どもたちにおはなしや本の楽しみ、喜びを届けていきたいと思っています。



「榎原市の子どもたちにたくさんの本を」

榎原市学校図書館ボランティア連絡会

代表 森 小夜子

私たちの会は、榎原の子どもたちに本を届ける活動をもっと活発にしたいという思いで発足した団体です。市内の小中学校で、学校図書館ボランティアとして活動をしている人や、ボランティア活動に興味、関心を持っている人の連絡、交流を目的として、月1回講習会を開いています。まだ発足して5年目ですが、ボランティアとしての心得に始まり、パネルシアター、ブックトーク、わらべ唄や手遊び唄、季節や学年の発達段階に応じた図書の選定について、発声の基本等、本を届ける技量を高める研修を重ねてきました。昨年からは、読み聞かせに関する小物作りも取り入れ、和気あいあいと活動を続けています。本年度も講師を招き、教育委員会後援で講習会を計画しています。地域の小中学校の子どもたちにたくさんの本を届け、心豊かに育ってほしいという願いで活動を続けているのです。榎原市の読書活動推進計画は、平成19年に、市・図書館・学校が中心となって策定され、ワーキング会議が開かれて実施されてきました。市・図書館・学校・地域・家庭・学校・ボランティアがそれぞれ関わりながら地道な活動を続けて来られたと思います。

先日、「機構改革に伴う今後の榎原市の子ども読書活動推進について」説明会が開かれ、参加させていただきました。機構改革はあるけれど、図書館の活動自体は変わりなく、もっと幅広く取り組んでいきたいというご説明に胸をなでおろしました。ただ、行きあたるのは市の予算面での厳しい現実です。図書館には充実した資料と専門性を持ったスタッフの増員等が求められていますが、なかなか難しいようです。私たちボランティアとしても、予算がいきわたり、もっともっとたくさんの本が榎原の子どもたちに届けられる機会が増えますことを切に願っている次第です。

図書館ボランティア「私のおすすめの本」

「舟を編む」

三浦しをん／著（光文社）

出版社に勤務する男性が、営業部から辞書編集部に引き抜かれ、仲間たちと新しい辞書作りに取り組む過程が描かれています。

一つの言葉にもその成り立ちといろいろな意味があり、その掘りかきと考えるととても面白いです。2012年本屋大賞受賞作です。

(M・K)

「シランフナー(知らんふり)の暴力」

知念ウシ／著（未来社）

“発言集”なので、具体的で優しい語り口です。だから何よりもわかり易いのです。それだけに沖縄の人たちの怒りがピンピンと伝わってきます。一言の申し開きもなく打たれるほかない私を感じました。もう知らんふりをすることはできないのです。

(S・F)

「子どもと本」

松岡享子／著（岩波新書）

子どもが好き、本が好きという著者の思いが詰まった1冊。第1章に描かれる著者の歩んでこられた道は、さながら朝ドラを見ているかのようにドラマティックです。子どもと本を楽しむということ、子どもと昔話を楽しむということ、たくさんの学びがあります。

(K・K)

修理をされていて気になりました！

奥付や扉、見返し、天や地、いろいろな部分で、ボールペンやマジックペンなどで、小さいですが●が記入されている本があります！

“読んだ印”をつけられているのかなと思います。もしそうであれば、個人の読書記録は自己管理でお願いしたいです。読書日記など、作られてはいかがでしょうか。

「苦海浄土」

石牟礼道子／著（講談社文庫）

“人間とはいかなる存在か”その問いかけから目を背けてはいけません。

水俣病—高度経済成長の光と影。“公害”は、教科書に載っている過去のことでしょか。東日本大震災による福島原発事故は、かつての水俣と全く同じではないでしょうか。

私たち人間は、豊かで便利な生活を求め続け、それを邪魔するものは蓋をして見ないふりをし続けています。

著者は、すべてを見続けようとしています。

(Y・N)

「日本語の科学が世界を変える」

松尾義之／著（筑摩書房）

アジア諸国の中で何故多くの日本人がノーベル科学賞、物理学賞を受賞できたかということについて考えた本です。アジア諸国の多くが母国語ではなく英語で科学を学習しています。これは翻訳だけの問題ではなく、漢字かな交じりの日本語が科学の概念を英語以上に表現できることがわかってきたそうです。科学絵本を紹介するうえで支えとなってくれる本です。

(図書館員 K・K)

〈編集後記〉

3年ぶりの図書館ボランティアだよりの発行は、5月頃に予定していましたが、気がつけばもう梅雨明けという時期になってしまいました。寄稿していただいた文庫連絡会、おはなしの会、学校図書館ボランティア連絡会の代表の皆さん、お忙しい中、本当にありがとうございました。

これからも協力し合って、自らの生涯学習としても取り組んでいきたいと思っています。

